時がつくる建築
クロノカオスからクロノデザインへ

加藤耕一スタジオ
2017年度スタジオ課題
学部対象

ARCHITECTURE IN TIME

Studio Koichi KATO 2017

Student works

歴史的建築を創造的に再利用する

文化財という概念は、歴史的建造物の破壊という「野蛮」に対抗する方策として、19世紀に誕生した。だが文化財の理念がもたらしたものは、再開発(破壊)と文化財(保存)の二者択一であった(クロノカオス[1])。本スタジオ課題では、破壊でも保存でもない、歴史的建築の創造的再利用(クロノデザイン)の実践の可能性を探る。

「つくらない建築」ではなく「つくる建築」

設計対象:RC造、S造、煉瓦造など、木造以外の歴史的建築を選定し、それを創造的に改変する。既存の歴史的建築空間のポテンシャルを最大限に生かしつつ、同時に既存の建築空間を大幅に改変することを厭わず、現代社会の文脈に接続する魅力的な建築空間を創造してほしい。

「リノベーション」を理論化する

本課題の狙いのひとつは、理論不在と言われる現代建築の状況のなかで、リノベーションと呼ばれる建築行為を理論化してみようということである。歴史的な建物を対象とすると、どうしてもオーセンティシティのモラリティが立ち現れ、最小限介入の設計に陥りがちである。本課題においては、歴史的な建物を創造的に改変した事例のリサーチにもとづき自ら理論武装したうえで、歴史性の継承と大胆で創造的な再利用を両立させるデザインを模索し、実践してほしい。

* * *

スタジオの進め方

前半(5/16中間発表まで)は、西洋の事例研究をする。
後半は対象建物を選んで設計する。

エスキス

毎週火曜日、14:00~ 加藤研究室(306号室)にて

指導メンバー

加藤耕一准教授
印牧岳彦・寺田慎平 (TA)

参考文献

加藤耕一　時がつくる建築リノベーションの西洋建築史
東京大学出版会 2017年

1　ハル・フォスター『ハル・フォスター著作集 アルシーヴ』

テーマ

2 今田多映《ひまつぶし会館》
窓と建物の再目的化

8 小日向柚香《時を接ぐモニュメント》

14 高倉光《廃線計画 三江線》

20 谷繁玲央《再構築の建築 Contextual Elements》
京都信用金庫九条支店移改築計画

26 中西亮介《NIHONBASHI CHRONO CROSS》

32 二上和也《Metabolism 1½》

38 藤生貴子《GL再興計画》

44 堀誠《時代、素材、高さ、、》

50 松本大知《イーグルギャラリー》
100年前の小規模ビルを活気の失われゆく街のシンボルに

56 楊光耀《Reflection》
The Renovation of the Solar Telescope

62 吉野良祐《神奈川県立近代美術館の解体的非再利用》

ひまつぶし会館
窓と建物の再目的化

今田多映

101号館は歴史のある建物で、新しいものと古くからのものとのはざまにあります。
周りを通る学生は多いのに、使う人は少ない。
だから、保存と利用を両立すべき建物だと思いました。
デザイン性の高い南北立面を保存しつつ、人通りの多い南北に開く。
そのために、たくさんある窓を入り口に変えて、
床の高さを、入り口となる窓に合わせて、
周りの環境との縫い目を外構や素材であわせつつ、
中身と外身の再目的化をねらった学生のひまつぶし空間をつくりました。

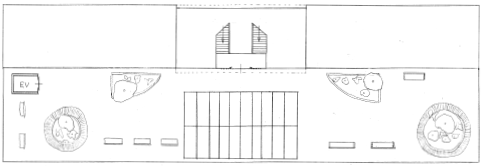
Statement

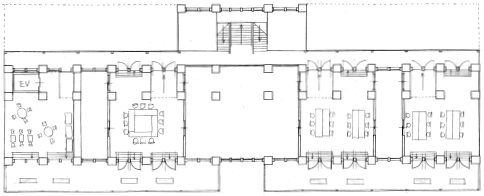
Site

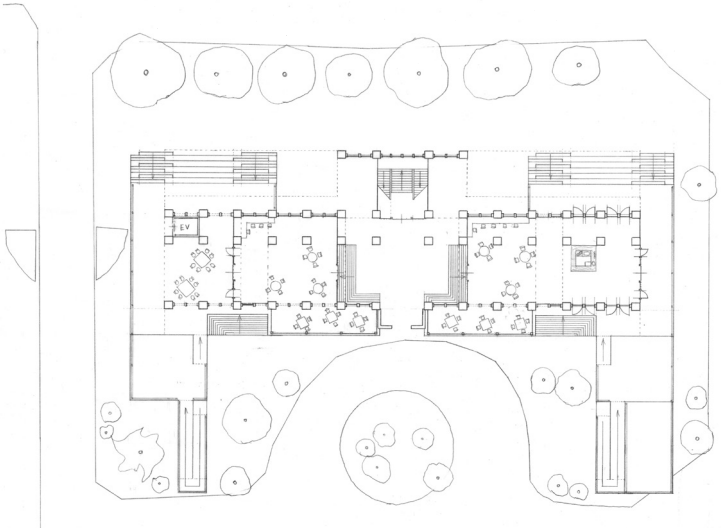
東京大学駒場キャンパスの101号館を学生のための空間として再利用する計画。1階の床面を腰の高さまで上げ、窓の下端に一致させたことにより、この歴史的建築のファサードに並ぶ窓がまったく新しいエントランスの開口部へと変貌した。

丁寧な実測調査により既存の建物と向き合い、それをもとに作成された模型によるスタディーはきわめて効果的だった。床面を高くするという単純な操作が既存の空間をこれほどまでに激変させることを示し得たのは、模型で思考した賜物であろう。建物外周に新たに設置されたデッキや大階段、そして外部化され通り抜け空間となった中央のエントランスホールなど、この建物の空間体験が大きく変わり、魅力的に生まれ変わるだろうことが、模型からよく理解できる。

惜しむらくは、その新たな空間体験や学生たちのアクティビティが、ボードの中で表現しきれなかったことである。1号館のような講義棟と生協食堂のあいだに位置するこの古く新しい建築によって、学生たちの時間の過ごし方は大きく変わるはずだ。そうした学生たちの、いかにも楽しげな「暇つぶし」がボードに表現できれば、この案の魅力がもっと伝わったはずである。



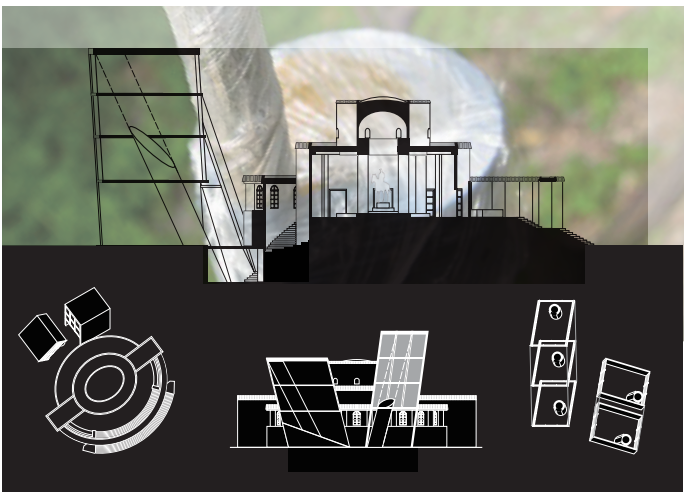




Plans (1:800)

時を接ぐモニュメント

小日向柚香

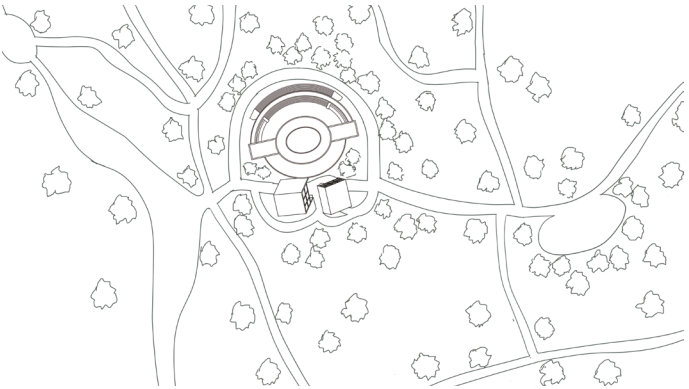


『旧多摩聖跡記念館』は、大正時代に明治天皇の行幸を記念して建てられたモニュメント建築である。

しかし、時代の移り変わりとともに「天皇の記念碑」という意味性は緩やかに忘れられ、多摩市の管轄となった現在は「市民のための空間」としての様々な機能と「モニュメント」としての絶対的な形態がちぐはぐとなって建築そのものの魅力が死んでしまっている状態にある。

今回の提案ではこの過去にも現在にも意味性を見いだせない仮死状態といえるモニュメントに、一見素材感も形態も異なるパーツを『接ぎ木』し、相対化することでモニュメントとしての機能を復活させるとともに、未来への意味を獲得しうる介入を目指した。
具体的には、①斜めの動線、②地下・地上・空中での新旧のつながりを考えた。
①は、斜めの軸線が交錯し表情を複雑に変えることで、かつて天皇のためにあった眺望を現代の多様な価値観を持つ市民が様々なレヴェル・方向性で享受し、また市民同士が互いの価値観を発見できるような建築を意図した。
②は、地下内部での人の移動、地上での新旧建築の外周と道の往来、二階以上での旧建築越しに得られる眺望への視線、というそれぞれのレヴェルによる新旧の多様な繋がりによって、相対的に歴史性と、現代に生きる各個人それぞれの立ち位置を意識する空間を意図した。

この①、②によって旧部分の持つ絶対性・完結性を相対化することで、新旧部分両方を包括して、現代的で多様な価値観を創出する「市民のモニュメント」となるような建築となることを目指した。



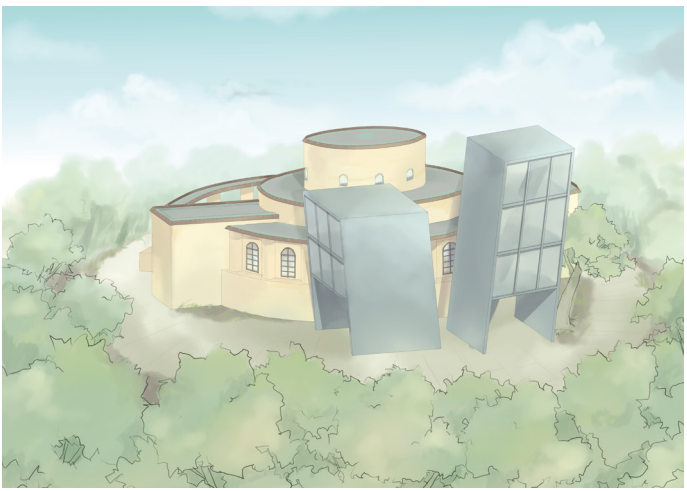
Site

関根要太郎、蔵田周忠により設計された、旧多摩聖蹟記念館。本作品は、この建物のリノベーション案である。

もともとこの建物は1930年に、この地への明治天皇の行幸(聖跡)を記念して建設された。紛れもないモニュメントである。その形態も、きわめて完結性の高いモニュメントになっている。ただし円形ではなく楕円形平面であること、そして壁面線からずれた列柱廊は、少し廃墟めいた気配も感じさせるが・・・。

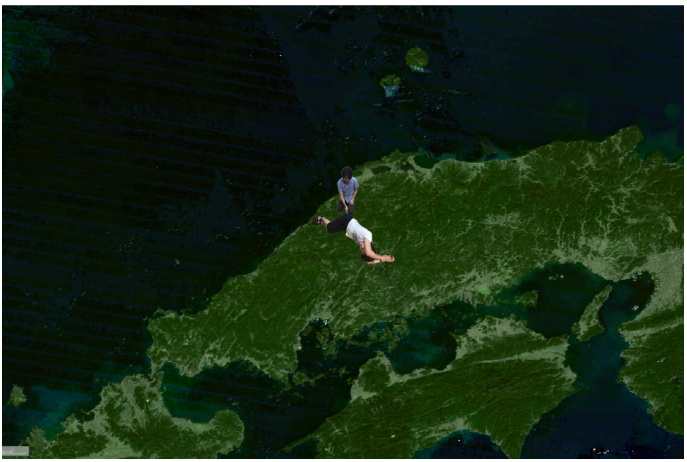
明治天皇を記念するこのモニュメントは、1986年に多摩市に寄贈され、市民のための空間となった。「記念性」というモニュメント本来の役割は失われたが、そのモニュメント的な強い形態は変わらないままだった。「今日からこれは市民のための建築です」と言われても、そのモニュメント性が変わらないままでは、市民もピンと来なかったのだろう。

その結果として生じた関散とした旧モニュメントに対して、本作品は、建築的な接ぎ木をすることで、枯れてしまった大樹に改めて新芽を芽吹かせようという提案である。設計的な提案は、もっと時間をかけて高めるべきだっただろう。しかしこのex-monument(旧-記念館)に着眼し、そこに建築的な接ぎ木を施そうと考えたその視点は、「時がつくる建築」というスタジオの課題に正面から応答したものと評価できる。



廃線計画 三江線

高倉光



あまざかる

ひなの戯れ

かわざかな

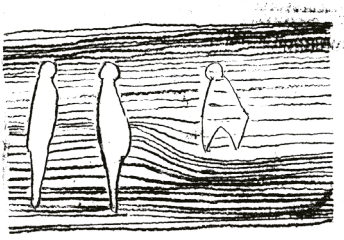
たゆたうものも

みな巣にかえる

Site

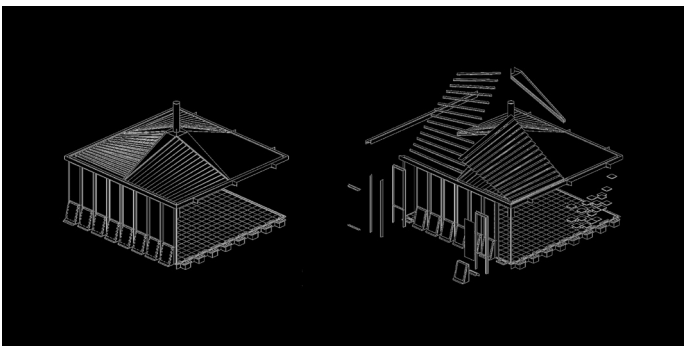
まもなく廃線が予定されている、広島県と島根県を結ぶ路線である三江線に対するリノベーションの提案。特に、路線の中間に位置する粕淵駅付近のトンネルにスポットを当て、宿泊施設へのその転用を提案している。これまで観光のための移動手段として使われてきた路線のトンネルを、魅力的な観光の拠点へと転換することで、地方における観光のあり方に対し、新たな道筋を提示することが目指されている。

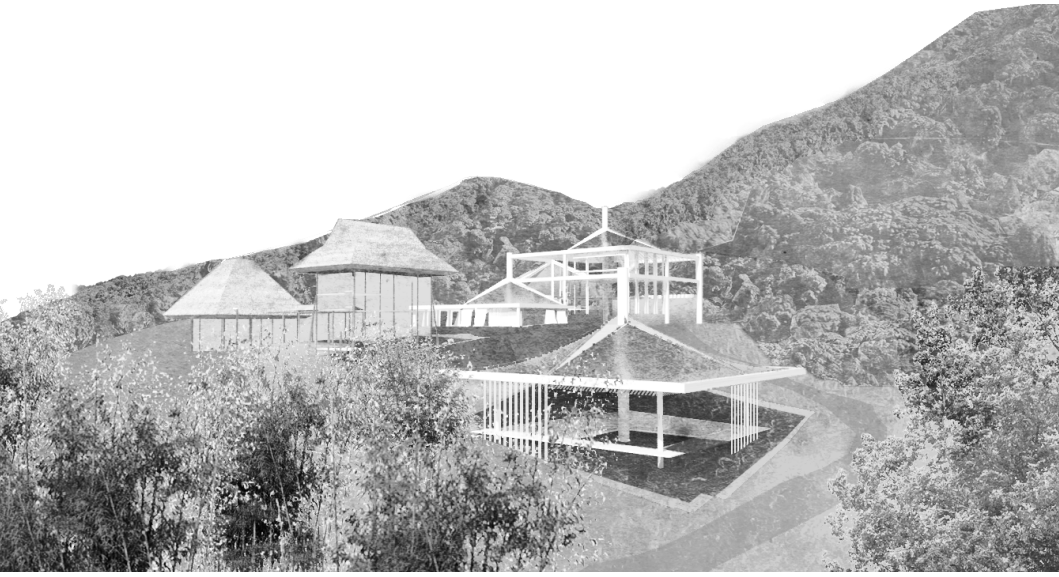
本提案は、トンネルという土木スケールの構造物をヒューマンスケールの宿泊施設へと転用するという野心的な試みであり、人体寸法を基準としてさまざまなかたちで立ち上げられた壁が、複雑かつ豊かな空間を生み出している。動物が人間の作った構造物に棲み着くように、鉄道のために作られたインフラに人間が棲み着くというイメージは、用途転用の問題を人間を超えた生物圏全体から捉え直しているようにも思われ興味深い。内壁の構造や素材、具体的なプランニングなどについて詳細を提示することができれば、さらにリアリティのある提案となっただろう。

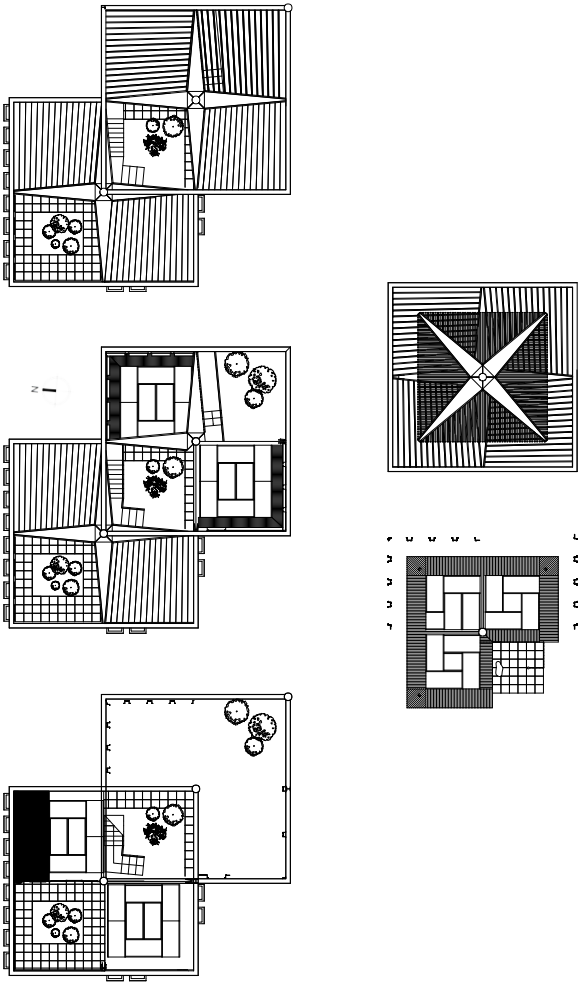


再構築の建築 Contextual Elements
京都信用金庫九条支店移改築計画

谷繁玲央







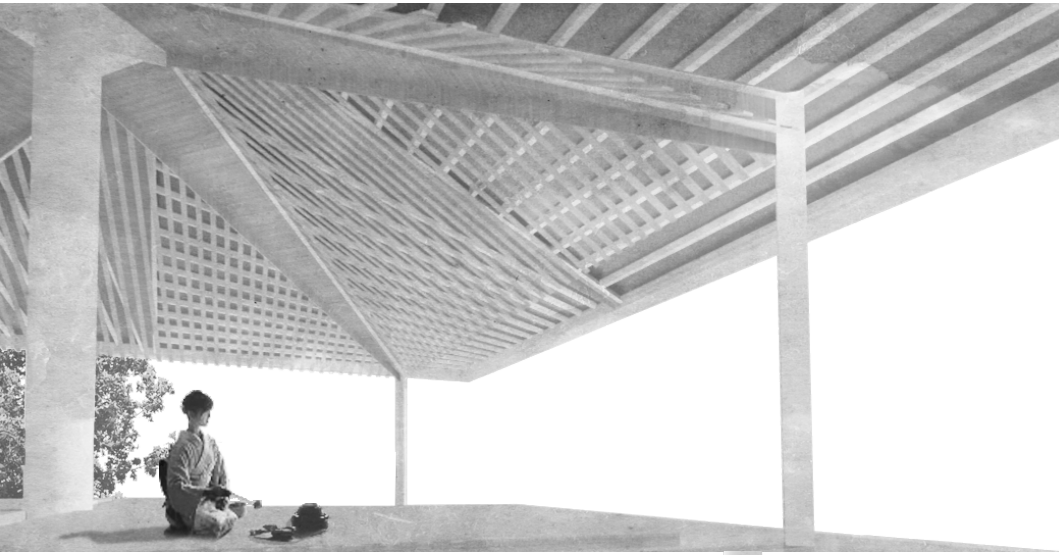
Plans (1:400)

菊竹清訓の設計によるアンブレラ・ストラクチャーによって実現された京都信用金庫を、メタボリズムでは想定されなかった方向に時間変化させようとする意欲作である。いうまでもなくメタボリズムは、時間変化をその設計理念に組み込んでいた。本作品では、菊竹建築が時間変化を引き起こすために設計していた部材のディテールを再検証し、菊竹自身も想定していなかった、まったく新しい建築空間に生まれ変わらせることに成功したといえるだろう。

建築の時間性という問題を捉える上では、いわゆる「リノベーション」以外にも無数の論点が潜んでいるはずである。本作品はそうした潜在的な建築時間論に、明示的に取り組んでいる。プレハブから伝統木造までを含むような乾式組立構造の解体・再構築において、建築の時間性は部材によって継承されるのか、それとも形態によって継承されるのだろうか。さらにその建物が移築された場合には、場所と建築の文脈はいかに切断され、再接続されうるのか。

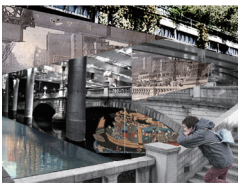
大地に根を張った重々しい構造物ではなく、movableでephemeralな建築の時間変化に取り組む上で、本作品は、同様の建築的存在が日本建築史のなかに歴然と存在していたことに目を向けている。茶室である。そして高台寺の「傘亭」とアンブレラ・ストラクチャーとの類推から、同じ京都市内で九条から東山への移築という提案が誕生することになった。

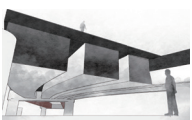
こうした建築的な複雑な議論の展開と、それによって生み出された建築がつくり出された風景と空間の魅力は、本作品の高い完成度に結びついているといえるだろう。

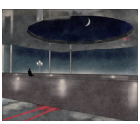


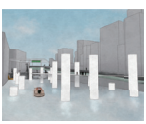
NIHONBASHI CHRONO CROSS

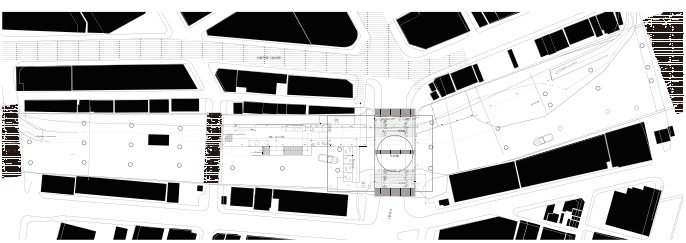
中西亮介









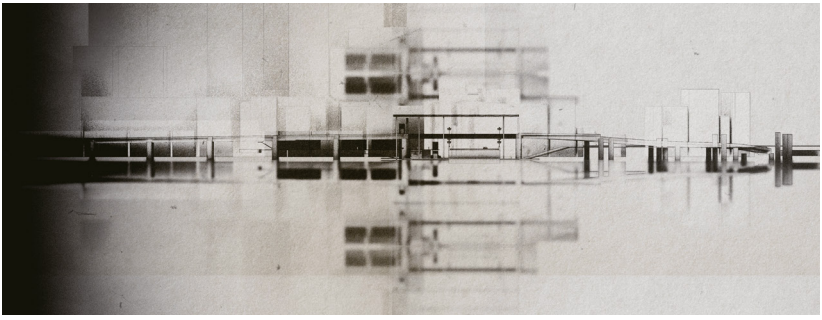


運河、石橋、高速道路――日本橋には江戸期以降の日本の、国家的な土木事業が交わることなく折り重なっている。重層的な風景は、日本の近現代の歴史を体現しているかのようだ。

しかし、日本橋の「歴史的な風景を取り戻す」ために近い将来、この地点の首都高速道路は地下に埋設され、地上から姿を消すという。

歴史は何のために保存されるのだろうか？歴史とは、我々が歩んできた道のりであり、それが容易には崩れない構造物として体現されている風景こそ、土木や建築の生み出す都市の魅力なのではないか。

首都高速を減築し、土木スケールの遺跡を作り出す。それらを眺めながら巡回するように、新しい機能を持った「平成的」なスラブの層が増築される。道、人、時代―すべての要素は大きな半鏡面の下で混じり合い増幅され、日本橋は東京における時の結節点になるだろう。

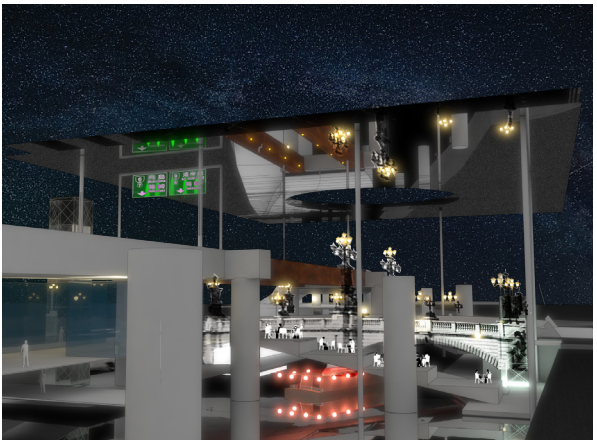


South elevation

日本橋上空、地下に埋設予定の中央環状線南部を減築し、空中広場、船着場、地下鉄出入口、商店・展示室を増築、そしてそこにあらわれた時の積層、土木スケールの遺構と日本橋の対比、複雑に交錯するプログラムといった様々な要素を調停するように、日本橋の上にハーフミラーの大部屋をかけた作品。

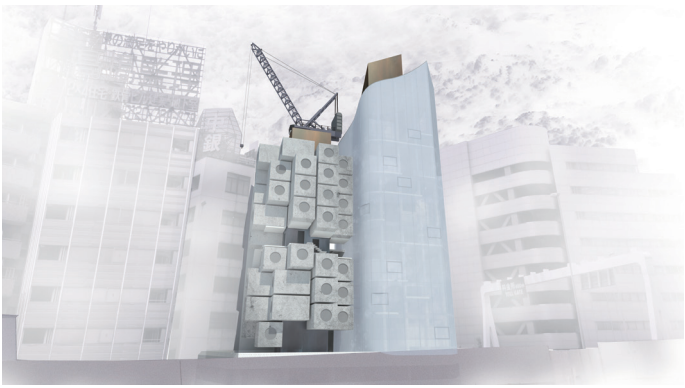
錯綜するコンテクストやスケールに対峙した意欲作であり、明治以前のノスタルジーのみが保護され、昭和を捨象しようとする都市計画を「歪なクロノカオス」として批判し、「歴史の積層」こそ日本橋、ひいては東京の魅力と謳う彼の姿勢は、新たな「時の積層」観として評価できる。

具体的な操作をみてみると、増設されたスラブと大屋根はともに軽快にみえるように提案されているが、スケールは巨大で土木的でもある。スラブは高速道路のように不定形なかたちを持ち、一方、大屋根は矩形と円形で構成され、フォルマリスティックである。これらの造形には説明が必要なようにも思える。もちろん彼の力点はそこではなく、ハーフミラーという装置によって無限に広がる「歴史の積層」、そして人々の流れが高低差をもって滞留する「日本橋」的広場空間にある。パースやオブジェでそのことはよく表現されている。だが、明治以前のノスタルジーの力に立ち向かうには、やはり自ら提案する建築もまた歴史の上に積み重なっていくことを無視はできない。新たな価値観に対応したこれからの造形の可能性についても考えてみたい。

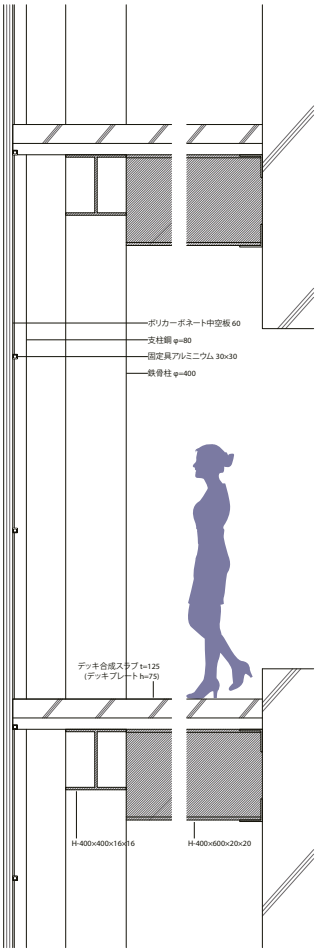


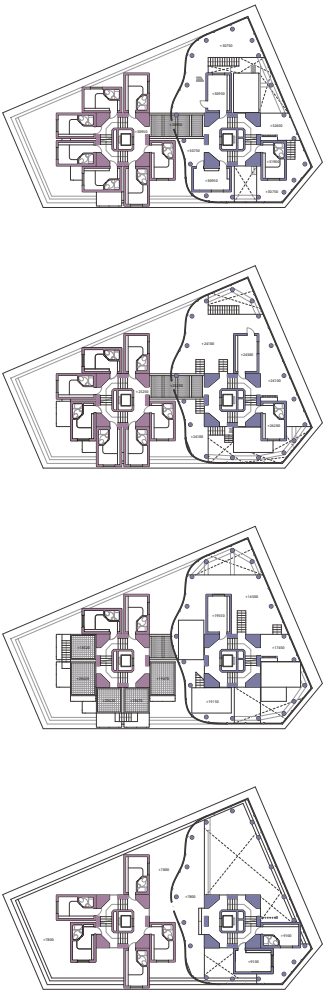
Metabolism 1½

二上和也



黒川紀章の代表作、中銀カプセルタワービル。現存する数少ないメタボリズム建築であるが、老朽化問題からその行く末が問われている。本設計では、この建築が持つプレゼンテーション性とシステム的欠陥という二面性に着目し、左右の塔で異なる操作を加えることで、この建築が持つ本質を明らかにする。左の塔はプレゼンテーション性の尊重からアート作品化し、右の塔はシステム的欠陥の批判からカプセルのインテリア化という転生を行うことで、カプセルタワーは、建築の凍結・膠着を是としない新たな生まれ変わりの象徴になる。





Section detail (1:50)

Plans (1:800)

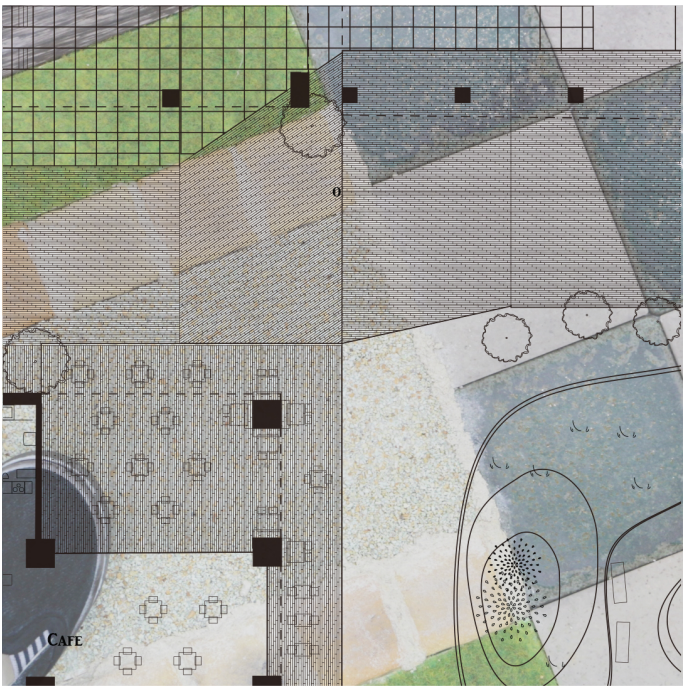
黒川紀章設計の《中銀カプセルタワービル》(1972年竣工)に対するリノベーションの提案。1960年代の建築運動「メタボリズム」を代表する作品の一つとして知られる同ビルであるが、当初想定されていたカプセルの交換が実際にはうまく行われなかったこと、また建物内におけるアスベストの使用などから、現在では建て替えか否かの宙づり状態となっている。本提案では、同ビルが持つ高い芸術的価値とその実際上の問題点を、「プレゼンテーション性」と「システム的欠陥」の二面性として捉え、二本のタワーに対するそれぞれ異なった介入によって表現している。

有名かつコンセプト性の強い同ビルに対する介入は困難が予想されたが、完成度の高いパネルとオブジェによって、説得力のある案 となっている。既存建築に対するリサーチと提案の明快な結びつきは、本スタジオの課題であった「リノベーションの理論化」に対しても、十分に応えるものである。同ビルに代表されるメタボリズムの試みを、成功か失敗かの二者択一として捉えるのではなく、その両義性を含み込んだかたちで建築化した本提案は、建築の経てきた歴史性をリノベーションにおいていかに表現するかという問いに対する、解答の一つを示しているといえよう。

最後に雑駁な感想ではあるが、皮膜による覆いと屋上に据えられたクレーンによって、(期せずして?)工事中の現場のようにも見える本提案は、東京という都市が新陳代謝していく様を象徴的に表現しているようにも思われ、興味深かった。

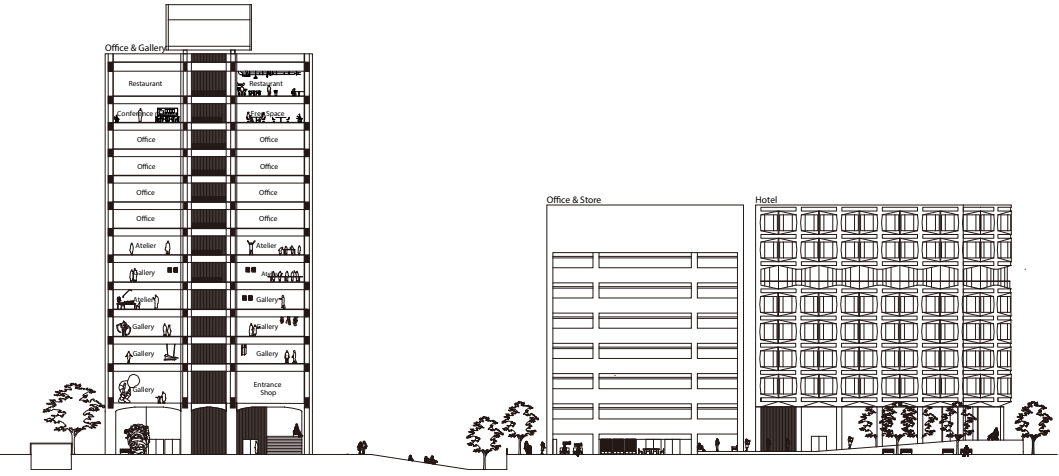
GL再興計画

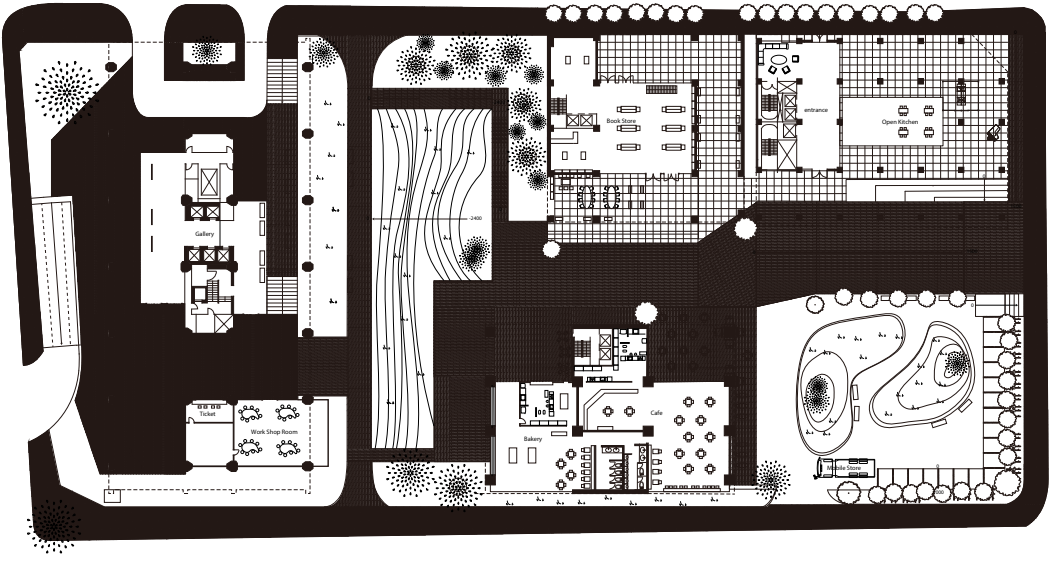
藤生貴子


Cafe

建築であふれかえる東京で、それでも目をひく建築はどれくらいあるだろうか。

丹下健三によってつくられた旧電通築地ビルは人がいなくなった今も銀座の一角に力強く建っている。その足元に広がる自動車のための空間を、周辺のビル一体を減築・改築することで豊かな歩行空間へとつくりかえる。強く印象的な建築をまえに、GLの高低差や素材を繊細に変化させるという手法によって空間そのものをリノベーションすることを目指した。人々の活動を制限することなく、少しづつ諧調の異なる空間を用意することで人々の居場所をつくり、偉大な建築に再び人々の思い出が刻まれていくことを願う。


Office & Gallery
Restaurant
Restaurant
Conference
Office
Office
Office
Office
Office
Office
Office
Office
Atelier
Atelier
Gallery
Atelier
Gallery
Gallery
Gallery
Gallery
Gallery
Gallery
Entrance
Shop
Office & Store
Hotel


Gallery
Ticket
Work Shop Room
Book Store
entrance
Open Kitchen
Cafe
Bakery
Waffle Store

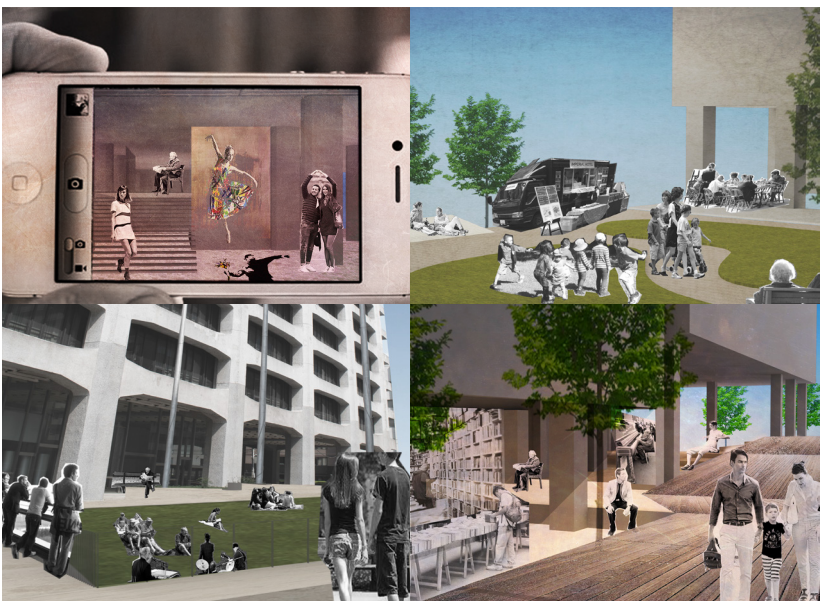
Plans (1:1000)

旧電通本社ビルを含む街区を対象とし、街区内のオフィスビルを適宜転用・減築しながら、外構を中心に手を加えることで建築そのものの価値を更新させる提案。

60年代のGL部分の計画を「自動車のための空間」と定義し、ビルが取り壊される運命にある現在、この空間を「余剰・余白」と読み替え、力強い建築を核としながら、過ごし方が定義されていない、にぎわいをもたらす広場を目指した。

「強い構造」としてのモニュメンタルなオフィスビルに対して、「弱い構造」ともいえるピロティ空間の意味を変容させる彼女の視点は「歴史的建築の創造的再利用」というスタジオのテーマとも合致する。特筆すべきはその「弱い構造」が故、周りの比較的凡庸なオフィスビルをも取り込みながら、一体の広場として提案している点である。

ピロティ空間に侵食する歩行空間、高低差や異なる素材による舗装によってゆるやかに分割される領域は、図面とオブジェによって効果的に表現されている。この贅沢な歩行・滞留空間のさらなる可能性(手法・表現)を是非深めていってもらいたい。



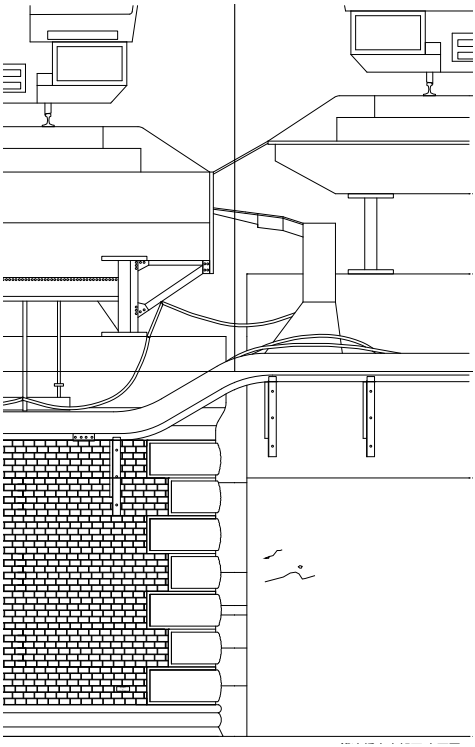
時代、素材、高さ、、

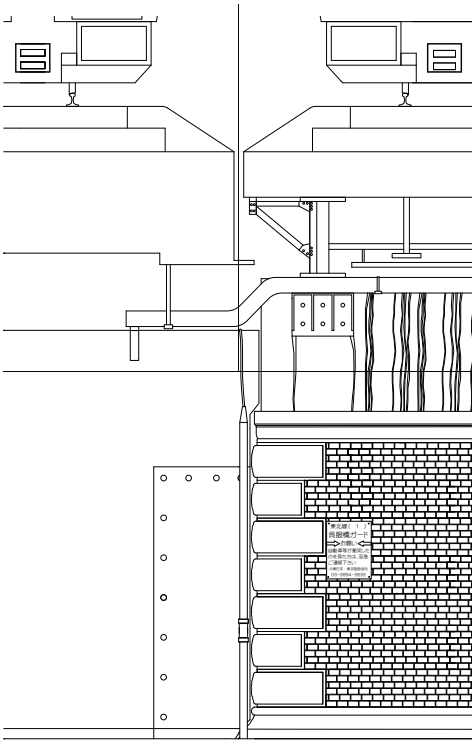
堀誠

敷地として選定したのは、東京国際フォーラムの向かいに位置する、ある高架下空間である。この路地は、異なる年代に建設された三つの高架を横断する形で存在し、素材やアーチのスパン、高さなどの変化を体感することのできる特異な空間である。

設計のコンセプトは、この価値ある空間を保存していくための「教会的空間」をこの敷地に作ることである。この高架下空間は、ちょうど丸の内と八重洲の境界部分に位置し、両者をつなぐ空間となっている。1914年に東京駅の駅舎が完成し、それに伴って南北方向に鉄道用の高架が建設されたことで両者の境界は明確化し、それ以来各々が独自の発展を遂げており、現在は、丸の内は高さやファサードなどの統一された洗練された街、八重洲は高さの様々な建築が林立する雑多な街となっている印象だ。ところが、2020年の東京オリンピック開催に伴って、近年再開発が盛んになっている。今後、計画によれば、雑多である八重洲側も丸の内側のように整備された街になり、加えて八重洲と丸の内を結ぶ連絡通路も複数本建設される予定だ。その結果、八重洲と丸の内の境界は一層曖昧化し、いずれは均質化された街となってしまうのではないだろうか。そのような中、この敷地のような、八重洲丸の内の発展の歴史が凝縮されているともいえる空間を恒久的に保存されうる形として残すことで、再開発による均質化に対し、微力ではあるかもしれないが反旗を挙げることができるのではないか。さらに、教会というのは、「政教分離」という言葉にも見られるように、行政の介入できない場所とも考えられ、教会的空間をこの地に作ることで、再開発の波にも飲まれず、さらには八重洲・丸の内という人やモノが忙しなく行きかう東京の中心において、人々の心の拠り所となる空間になる可能性を秘めている。

具体的操作としては、中間の高架の既存の柱を両側の高架方向にも同スパンで増築し、教会的な空間としての統一感を出した。また、各々の高架にもともと用いられている素材はできる限り保存し、各々の味を楽しむことができる。また、最も新しい、東側の新幹線の高架下は、「アプス的空間」として白い柱、ガラスによる背面採光、台座を設け、どこか神秘的な雰囲気を作り出す。夜間は、柱の上部、梁裏に仕込まれた照明からの間接光でこの高架下空間は暖かく照らされる。





Elevations (1:80)

東京駅ちかく、丸の内と八重洲をつなぐ高架下の空間を対象に、異なる時代・素材・空間のプロポーションに着目し、介入を試みた作品。

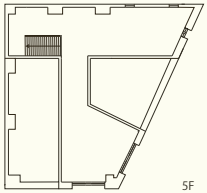
段階的に発展した故の複層的空間から着想された「教会的空間」という彼のコンセプトは、照明デザインという手法、そして人々の心に寄り添う空間としての保存というシナリオを導き出す。

照明はまるでそこにかつてからあったように、新設した柱や梁に埋め込まれ、アーチや梁天井、表面の仕上げの違いにも気を配りながら、天井をやわらかく照らすように設計されている。「アプス的空間」と呼ばれる場所ではクライマックスにふさわしく、背面採光、白い柱と台座の増築がおこなわれた。

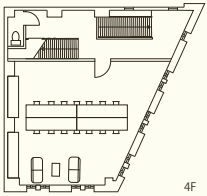
リサーチ段階での詳細な断面図でえられた視点が、段差や柱への細やかな操作として提案でもいかされている。模型も美しい。欲をいえばここに人々の活動がどう関わるのか、設計(照明以外)と表現(模型写真・図面)の両側面からさらにみてみたかった。そうすれば「人々の心に寄り添う空間」がより微細に、説得力をもって、あらわれてくるだろう。

イーグルギャラリー
100年前の小規模ビルを活気の失われゆく街のシンボルに

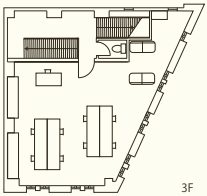
松本大知



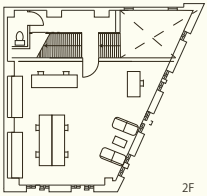
5F



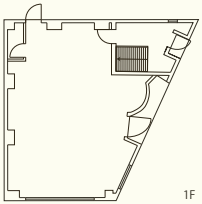
4F



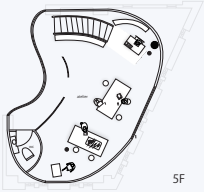
3F



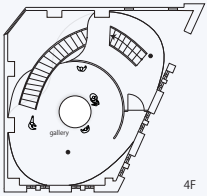
2F



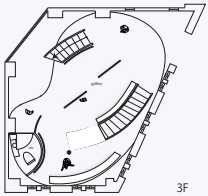
1F



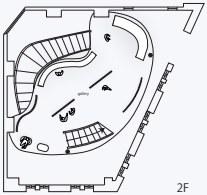
5F



4F



3F



2F

1F

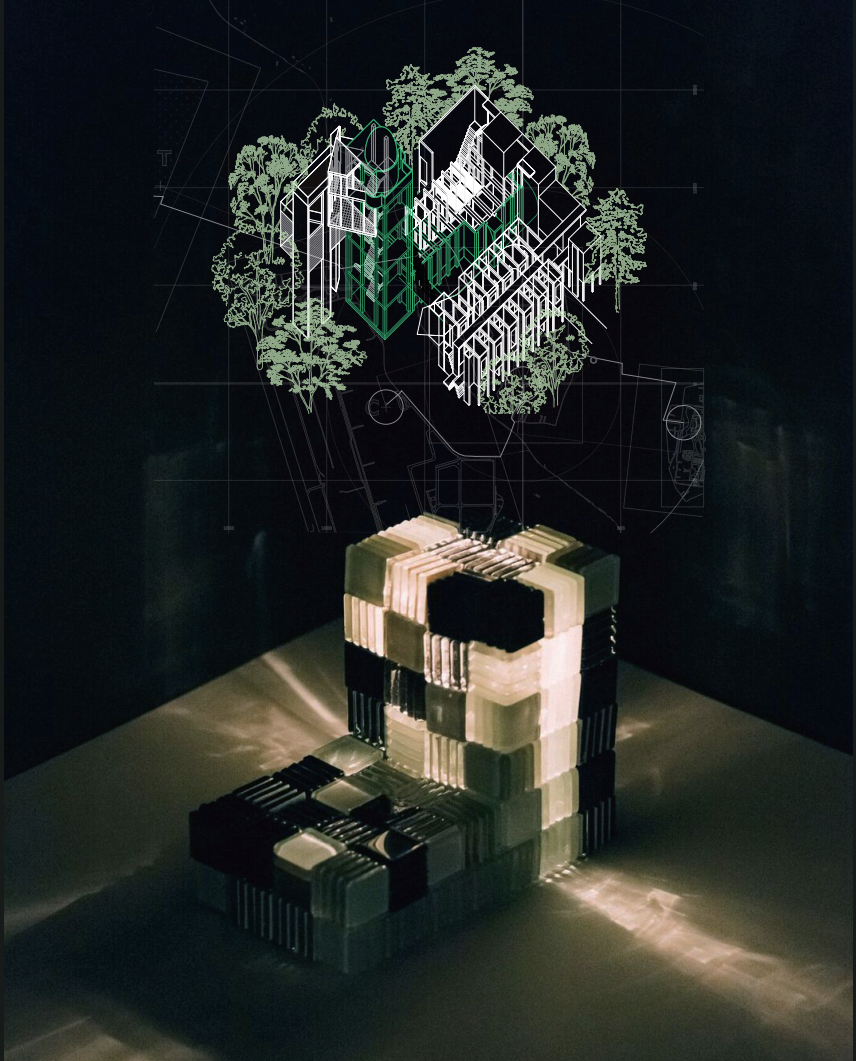
江戸からの繊維問屋街の大きな交差点の角にひっそりと100年間もの間立ち続ける『イーグルビル』が改修対象。関東大震災後の復興建築であり、被災の教訓から耐火耐震に長けた鉄筋コンクリート五階建てのビル。当ビル自体にコンテクストが密に詰まっているのだが、そのコンテクストを活かしながら、現代の東京が抱えるビル密集地帯の問題をこのリノベーションによって解決していこうという趣旨。ビルが街区に沿って、密に整列する街並み。通りに面したところ以外は、無表情なファサード。見えないビルの裏側。こういったビル密集地の閉鎖性、過密性、無機質性。これらに変化を与えることで街としての、ビル密集地帯としての全体に変化が及んでいけばともくろんだ。

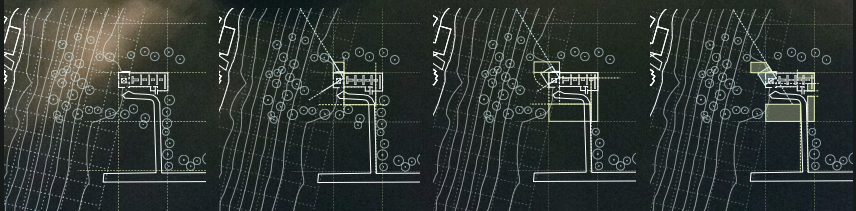
日本橋馬喰町に建つ小さなビルに対するリノベーションの提案。関東大震災後に建てられ、第二次世界大戦中の空襲や戦後の再開発の波をくぐり抜けてきた同ビルは、どこにでもある「アノニマス」なビルであると同時に、ほぼ一世紀におよぶ時間性と、問屋街として栄えてきた日本橋という場所性を内包することで、独特の魅力を帯びている。本提案では同ビルに対し、そのファサードは全体的に保存しつつ、内部に対して大胆な介入を行うことで、ギャラリーへの生まれ変わりが構想されている。
小規模ビルが不可避的に抱え込む、閉鎖性や圧迫感といった問題点に対し、本提案ではスラブの減築や開口部の操作によって、内部に回遊性を持たせると同時に都市に対する開放性を実現している。ともすれば「ファサード保存」の一例として見られかねない提案であるが、再開発と保存の妥協の産物としてのファサード保存がしばしば内外の無関係な並存に陥りがちなのに対し、本提案では曲線的なデザインがファサードと内部空間のあいだに鮮烈な対比を作りつつも、なめらかな線によって不思議な調和が生み出されているように思われる。模型写真から伺える、減築によって生み出された吹き抜け空間も魅力的である。パネル、オブジェの表現に関しては、今一歩の洗練ができたかもしれない。今後の発展に期待したい。

Reflection

The Renovation of the Solar Telescope

楊光耀



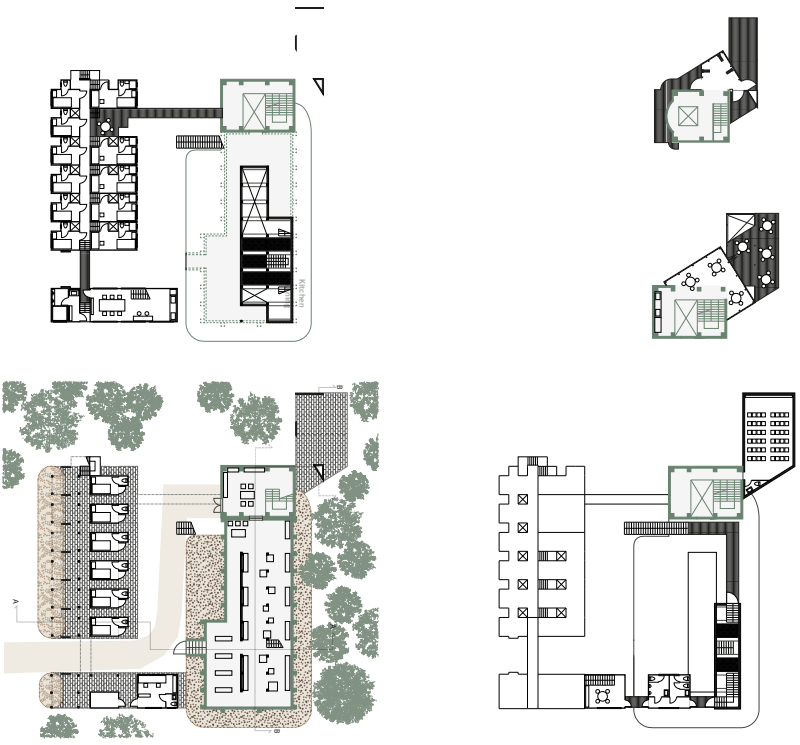


時間とともに複数の要素が集まって成り立ってきた建築は、重ねてきた時間の層ごとに、それらの要素に異なる性質や意味が表れて複数の相を露呈する。

三鷹国立天文台にある太陽塔望遠鏡はこれまでに「運転期」「停止期」「保存期」と三つの時間の層を重ね、それぞれ「機能性」「即物性」「象徴性」と特有な相を経てきた。これから「改修期」を新たな層を重ねるとき、三鷹国立天文台から周辺に視野を広げていくと、調布飛行場、神代植物園、多磨霊園との都市的な関係性が浮かび上がり、そこから「文脈性」の相が露わになってくる。

さて、今回のリノベーションでは、太陽塔望遠鏡が重ねてきた時間の層を遡行することで各々の相を追憶し、新たな空間体験を持った建築として現代に蘇らせる。

そこでは、そのような時間の中で露わになった複数の相がリノベーションの設計手法へと反映されていき、太陽塔望遠鏡を構成する各要素が、「文脈性」「象徴性」「機能性」「即物性」の複数の相のもとで、抽象から具体までの「Program」「Sequence」「Extention」「Elements」の各段階の設計が行われていく。



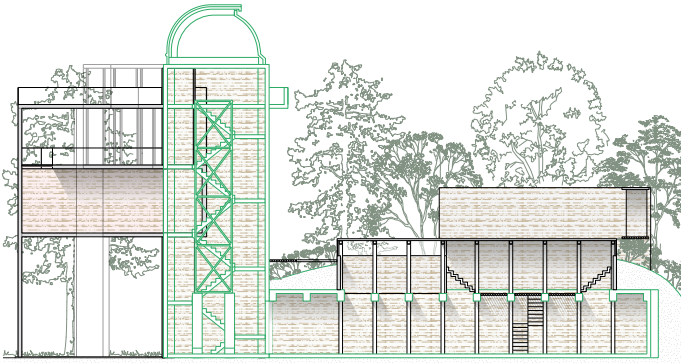
Plans (1:800)

東京郊外、植物園、飛行場、霊園という特殊な施設に囲まれた、国立天文台三鷹キャンパス内に位置する太陽塔望遠鏡が設計の対象である。

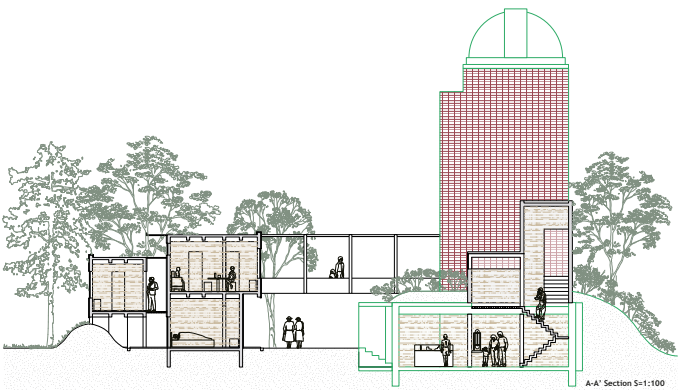
その強力な敷地の文脈性が、建築自身がもつ歴史(運転期・停止期・保存期・改修期)・性質(機能性・即物性・象徴性・文脈性)と重ねあわせられ、Extension / Elements / Sequence / Programというリノベーションのレイヤーとして、太陽光からスペクトルが取り出されるように、導き出される。

このコンセプトを示したダイアグラムはオブジェでも繰り返し強調され、一見複雑な4つのレイヤーにもとづく建築への操作を明快に理解することができる。「リノベーションの理論化」というスタジオの課題に真摯に取り組んだ作品であり、設計手法として、さらなる発展も期待したい(たとえば、文脈が欠如した敷地の場合など)。図面表現・オブジェも精緻で、空間がたやすく想起できる。

ひとつ気になるところがあるとすれば、ダイアグラムによる形態の決定は外部からなされる一方、図面やオブジェ、イメージでは内部の空間を主に取り扱っているので、その間の関係が読み取りづらい点だ。外部と内部の関係を一体のものとしてうまく表現することができれば、この提案(そしてこの設計手法)はさらなる可能性をもつ。



B-B' Section S=1:100



A-A' Section S=1:100

神奈川県立近代美術館の解体的非再利用

吉野良祐

美術館としては閉館したものの、解体は免れることになった神奈川県立近代美術館。戦後日本建築におけるモダニズムの代表作であったこの建物が、美術館としての近代的な機能を失ったとき、その構築物はそれでもなお近代建築と呼べるのだろうか?

こうした問いからスタートして、この提案では文化財的な「保存」ではなく、「解体」が選択された。その提案は、機能を失った建物に新たな機能を与える「転用」ですらなかった。「機能」はでなく、骨組みを構成する「鉄」や、壁を構成する「大谷石」の物質性(materiality)に、この建物の本質的なraison d'êtreを見出し、それを表象させることが本作品の狙いだったといえるだろう。

鶴岡八幡宮の境内というきわめて特殊なその立地から、本作品では、機能を失ったこの構築物に、灯籠を中心とした数々の構築物とのアナロジーを見出した。その視点はきわめてユニークであり、可能性を感じさせる。ただし、それらの灯籠のform、material、function、typologyの分析は、それ自体が近代的であり、本作品の解体的「非」再利用には、まだ結びついていないように思われる。神社境内に立ち並ぶ数々の前近代的なオブジェを、「非」近代的な建築言語で分析することこそが必要だったかもしれない。